昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和42年8月1日発行　第4巻第8号通巻第36号(毎月1回・1日発行)

月刊漫画

ガロ

No.36
1967
8月号

カムイ伝 ㉜

赤目プロ作品
白土三平

鬼太郎夜話③
水木しげる

（前回まで）

窮乏財政を続ける**日置藩**では、その打開に数々の施策を試みながら、なお根本的な解決策を見出せず、ますます赤字財政の深みに追い込まれていった。それは、日置領が石高七万石でありながら、百姓を自給経済の中に閉じこめ、その発展を自ら阻止することにより、毎年累積赤字を出しながら、さらに天災、飢饉等の百姓の被害による年貢の減収に追い打ちされるからであった。

そこで、藩では、基本的な収入源である年貢の割増し徴課、商人等からの賦課金の増収を図る一方、内部的には、御一門払い、藩士の減俸を行なって財政立て直しを試みたが、これらが悪循環の中での閉塞的な施策に過ぎないことは明らかであった。むしろ、その結果、一揆や藩内勢力抗争の基盤を醸成することで、逆に経済危機の増大につながっていった。

こうした藩の弱体化は、それでなくても外様大名の取潰しを狙っている中央幕府にとっては、恰好な対象であった。幕府では、ひそかに隠密団を放ち、日置藩の内情を探らせ、取潰しの機会をうかがっていた。そこで、江戸表での**闇太郎**と名乗る浪人者による幼君**国千代**の暗殺事件は、自らその機会を幕府に与えたかにみえたが、その折、意外にも、ある記録によって、日置藩が幕府といえどもうかつには手をつけられない秘密を蔵していることが明るみに出たのであった。

ここで、さらに、この秘密をめぐって幕府隠密団の暗躍が続けられるが、その忍びのひとりが**カムイ**でもあった。すでに隠密団によって、秘密の糸口が**蔵六屋敷**（**城代家老**屋敷）の亀にあることをかぎあてられている現在、カムイは、その秘密をおのれの手で探り得ても探り得なければ得ないで、やはりこの種の任を負った忍びの当然の末路として抹殺されることを真近かに予感していた。嘗つて、人間らしい自由と誇りとを獲得するために非人から飛躍し、剣の道を学び、忍びの世界に入った彼であったが、彼はいま自ら求めた世界の掟としがらみの中で、おのれを圧し潰す鉄壁に突き当たっていた。この壁を突き破るには、ひとつの方法しかない。それは、彼の師匠**赤目**がそうしたように抜忍となることであった。だがその赤目を除けば、伊賀広しといえども嘗つて最後まで抜けおおせた者はいないといわれる至難さの中では、抜けおおせることは極微な賭けの確率の中におのれの命を投げ出すことであった。あまつさえ、カムイのこの心の動きは、すでに小頭**搦**（からみ）**の手風**（てぶり）によって読みとられているのであった。

同じこの搦の手風に**正助**が捉えられていたころ、**花巻村**では、藩の役人の手によって新開地の測量が行なわれようとしていた。藩では財政立て直しの窮策として、通常数年の鍬下年季を不当にも勝手に短縮しようと計ったのであった。

百姓は、この測量を阻止するために本能的に立ちあがった。さっそく他村への連絡がとられた。自ら血と汗とによって墾し開いた土地を守る百姓は、嘗つてないほど団結していた。正助は不在ながら、**苔丸**と**ゴン**とがその先鋒に立った……。

月刊漫画 **ガロ** 八月号 目次

表紙絵・白土三平

赤目プロ作品　白土三平

つづく （禁転用転載） 1967年4月6日 カムイ伝㉜ 完

（後記）

度々、話をばらばらに切ってしまったことをお詫びする。人間も、ちょうど中古の自転車のように、一度故障しだすとあちこちに欠陥が現われるものだ。しかし、とにかく、少しずつチューブの穴を埋めながら仕事を続けていかねばならない。自転車にはすまないが、ボンコツ置場に入るにはまだ時間があるようだ。

だいたい、㉚、㉛、㉜を一つの巻にまとめるつもりであったが、油が切れたりしてかかる結果になったわけだ。とくに、30回はこの32回の後につくべき話であろう。

私の作品の特徴は、主観性が極度に強いらしい。

あるものを得る場合、人々が力を合わせて獲得したものと、ある特定の人物の智力と才覚にのみ頼って得たものとは、その表面的結果が同じであっても、質的にはだいぶ開きがある。たとえ、そこに時間の浪費と多くの犠牲があったとしても、得た価値は大きく、前進性を有する。

この回の、正助、苔丸の対立場面においても、非人として耐えてきた男と、下人から百姓へ、そして、才能にめぐまれ、軌道に乗った男との差異だけでなく、又、両者のその時点にのみおける正否の問題としてうけとられると、甚だ都合がわるい。都合がわるいといえば、他の描写においても、力不足のため、読みかえしてみて不充分な箇所をいくつか認めざるを得ない。

嘗つて、大原幽学（1797～1858）が、千葉県長部村における、農家の移動を含んだ徹底した耕地の「交換分合」、又、いっさいの土地の私有をやめて共同管理に移した「先祖株組合」は、彼の業績の中でも特にすぐれたものとして評価されているが、農民自身土地の交換分合が農業経営にとって有利であることを感じていながら、おのれの土地に対する異常なまでの執心、たとえ客観的にみて同じ大きさの価値と認められるにせよ他人の土地と交換することを強く拒むものであり、いわんや祖先以来住み続けてきた家を移動するなど思いもよらぬ業であったろう。まして、法的な強制をもってしても実現することの困難なこれらの事業を、一介の浪人にすぎない幽学が成し得たということは驚異に価する。もっとも、このために彼は幕府の弾圧の中で自刃して果てるのであるが……。

日置領花巻村の正助達が推し進めている新田畑の開発、又、新開地の若者組における管理は、これら幽学の果たしたものに近似した方向へ向かう過程として、その途上における一つの未完成な事件としてゴン、アケミの悲恋の問題も描き現わせなかったことを残念に思う次第である。

現在、良心的な歴史年表を見て、一揆の件数の多いのに驚くものである。年表によっては、その詳しい仔細を知ることは難かしい。だが、戦国時代、徳川封建社会、そして、現代へと続く歴史の中で、この世の中をここまで推し進めてきた民衆が、そのおのれらの力をおさえられ、それでもなおかつ前進しようとした涙ぐましい犇めきをが聞こえてくるようである。学校における日本史の教科書も、一揆を中心に書きかえねばならないだろう。なお、一揆の年表を見れば、さらに詳しく記されている、その中に、各所に「不隠」という箇所が見うけられる。一揆、騒動、打ち毀し、強訴等の言葉に比べて、一見消極的にとられやすいが、むしろ、この「不隠」の中に見のがせないものがあるように思える。例えば、農民が数多く集合をもつだけでも法度とされていた当時にあって、一揆、強訴が起きるまえにも周到な計画と準備のための会合がもたれたことであろう。しかも、それも多くは、事前に察知され、解散もしくはその段階で圧し潰された例は数かぎりないだろう。その中で、敵が察知するより早く裏をかき、集合地に弾圧の手が伸びたときにはすでに会合は終り、先手を打って目的を達するか、一揆なくして要求を得た場合も少なくない。これらの場合でも、年表によれば、ただ××村百姓不隠という言葉一つにかたづけられてしまうのである。